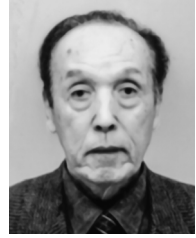


原爆投下直後の広島で 救護活動に出動して

桶田 岩男（当時16歳）
函館市



広島に原爆が投下された時、私は賀茂海軍衛生学校で教育中でした。

我々学生144名は救護活動の命令を受け、トラックに医薬品・医療機器等を積んで直ちに現地に急行し、救護活動に突入して原爆の凄まじさを身をもって体験しました。誰もがこの世の姿とは思われない、言葉や文章では到底表すことのできない惨状で、これが地獄というものと、一瞬我と我が目を疑い、強烈なショックを受けました。しかし、原爆投下直後に現場に直行した我々救護隊員全員も、自らの体を死の灰にさらすことになっていたのです。

街は見渡す限り焦土と化し、原爆ドームがただひとつポツンと残っているだけで、彼方の山裾まで見渡すことができました。道端の無数のガレキが燃えくすぶる中から、うめき苦しむ声、助けを求める声が聞こえてきます。またいくつもの橋を渡るたびに、川の中を無数の人が流れて行きます。強烈な光と熱風のために体を焼かれ、苦しみに耐えかねて川に飛び込み死んでいったのでしょうか。

救護所を開設すると、あっという間に数千人の被爆者が集まってきました。全身に火傷を負った人、両足を切断された人……、ほとんどの人が皮膚が垂れ下がり、中には骨まで見える人もいました。傷口を治療しても皮膚がないので包帯など巻けない状態でした。

医学的に見て助かりそうな人には応急処置を施しましたが、助かる見込みのない人には、大丈夫だからしっかりと、精神的な慰めの言葉をかけるだけしかできませんでした。兵隊さん水を、水を下さい、と悲痛な声があちこちから聞こえます。水を飲ませたら死ぬからダメと言われていましたが、あの時に水を飲ませてあげればよかったと後悔されてなりません。70年過ぎた今でも、そのことが心に深く刻まれて忘れられ

ずにいます。

また親兄弟姉妹を探し求めて、迷い子が多数集まってきました。名前を聞いてもわかりません。夢遊病者のようにふらふらし、ショックで口も聞けない子どもや着物に包まれて泣き声も出せない赤ん坊もいました。この世で一番危険な恐ろしい出来事、世界の誰もが経験したことの無い出来事が降りかかったのですから無理もないことでした。朝になるとほとんどの人が死んでおり、救護所の向かい側の横川駅の広場は死人の山と化していました。今日の医学であれば助かった人もいたかもしれませんが、今の医学でも解決できないのが原爆病です。

世界で唯一日本人しか体験していないこの現実に対し、一日も早く国の責任において補償の法律を制定すること、それこそ日本が世界に示す平和宣言と言えるのではないのでしょうか。

私たちは誰に向かって訴えればよいのでしょうか。今日、世界では核保有国が増え続け、核戦争の危険がなくなりはしません。しかし、世界から核兵器を廃絶をしなければいつかは地球が滅亡してしまいます。今こそ世界の人々が、人種や宗教やあらゆる差別を乗り越えて、一丸となって核廃絶を訴えていかなければなりません。